

大陸（中支）

独立重砲兵

第六大隊桂林攻略戦

山形県 元 木 富士男

昭和十七年徴集兵でありまして、十八年の一月に大阪に集合し軍装を整え、大阪に滞在すること七日、広島を出航、釜山に上陸して貨車輸送をもって鴨緑江を渡り、中国大陸に入り、牡丹江省穆稜の独立重砲兵第六隊に入隊しました。三か月間の初年兵教育を経て四月には検閲も終了し、その三分の一は南方派遣要員に回されました。

八月には牡丹江南方で行われた関東軍砲兵演習に参

加し、九月から十月頃東寧県において対ソ戦を想定しての陣地構築に出動した。昭和十九年十月になり全部隊が移動することになり、穆稜から貨車輸送で南京まで行き、南京から船で揚子江を遡江して浦口を経由、その間空襲等があり対空戦闘等に休む暇もなく、ようやく武漢地区の漢口に到着した。重砲、彈薬器材、車両その他を揚陸、ここに十日間駐留して岳洲方面の偵察を行うため車両一台に六名の兵員を配備して先発することになった。

橋梁は爆破され道路は寸断されているので、道路を補修し、仮橋を急遽架設して前へ進むありさまで、火砲、弾列、その他重量物は船で運搬せねばならなかった。

覆疑港対岸への上陸は大幅に遅れ、白砂洲において

敵機の波状攻撃を受け、戦死数名戦傷十数名を出し、さらに十加、十五加、各二門が水没し、弾薬多数が爆発炎上し大被害を受けた。

悪戦苦闘を繰り返しながら長沙作戦に参加するために先を急いだが遂に間に合わなかった。部隊長は独断で光陽作戦に参加することを決意したが、制空権が敵の手にあるため昼間の行軍は不可能、誘導員の先導で河を渡る。兵站もないので食糧の補給もなく、携帯食糧も欠乏し、米の飯等一粒もない、島の南京豆を唯一の頼みの食糧とした。一夜にたった一キロの行軍しかできないありさまである。

兵は栄養失調になり、マラリア、回帰熱、アメバー赤痢になり死亡する者も出はじめた。自分の身体を動かすのがやっとで、とても他を助ける余裕等はない。夜間には炊飯ができない。灯火を発見されれば空襲されるのである。雑草も食糧とし、編上靴も破れて上ばかり、パカパカして下は素足、自分で草鞋を作り一時に間に合わせる。湘江を流れてくる屍体の地下足袋をとってそれを穿くありさまである。そうでもしなければ

ば裸足で行軍しなければならない。

夜明け近くなって食料探しに行くが思うように収集できない。野に生えている草で食べられるものはすべて採りつくした。栄養失調で体力が衰弱してゆくのがよく自分でもわかる。このような状態は岳洲から長沙までに至る戦備行軍の途中である。一個梯団車両約十二両位が夜間山地を行軍中爆撃を受け、車を降りて退避する際、敵機の機銃掃射を受け下士官一名戦死。戦車壕あり連日の雨で泥濘となった道路か島か判別のない所を悪戦苦闘をしながら尺取虫のように進んで行く。

戦車壕の幅は三十メートル位ある。砲や重車両が渡れるようにするには大変な苦勞による工事をしながら進む。栄養失調で瘦せ衰えた身体でも必死の形相で身体を動かした。このような旺盛な気力と責任感とであらゆる困難を克服して暗夜の中を進む。

十月三日、祁陽の渡河を敢行し、その他大小の河を渡り若林山に到着した。十月二十九日、砲兵諸部隊は桂林城攻撃のため大溶江口を強行渡河、戦闘加入のた

めの前進を続け十一月一日〜五日かけて甘藪渡に到着することができた。

独立重砲兵第六大隊は全村北方地区に陣地を構築し、敵の砲兵陣地その他の制圧を命ぜられその準備に忙殺された。十一月八日十五時戦闘開始、先ず効力射撃から始まり、制圧射撃に移る。轟音が一面に響き渡る。敵は岩山の頂上、中腹、裾部に自然の洞穴または穴を穿ってトーチカ化して堅固な要塞化して、そこから大小の大砲、機銃、小銃等あらゆる火器で猛射してくるので、第一線の歩兵も一時前進を止めざるを得ない状態でした。敵もアメリカ製のラインメタル十五榴弾砲で猛射してくる。その一弾が味方砲列の中に直撃命中、戦死一、重傷四、負傷数名の損害を出しました。

私の方は第一中隊、第二中隊、それぞれ二門づつの砲をもっていました。観測精度が高かったために命中度が非常に高くて初めての一発で敵のトーチカを直撃粉砕しました。

今まで十センチ加農砲が最大の砲であったのですが、十五加が戦闘加入してからはその威力に格段の相違が

あり、次々と桂林城壁を破壊し、敵の砲座トーチカを制圧して、桂林城内に立ち上がる火柱は物凄い迫力がありました。

第一線の歩兵もこの猛烈な砲撃に勇氣百倍、押し寄せる津波のように桂林城に肉迫、待機していた戦車と相呼応して城内に突入する事ができた。

山砲、野砲、野戦重砲、十五センチ加農砲、一挙に砲門を開いての猛射撃、砲口より迸る火筋、耳をつんざく轟音・着弾による破裂音、火柱、何もかも忘我、戦闘をしている事すら意識に無く無我夢中でありました。

我が砲列陣地は桂林城より四キロ程の小高い丘の上にあるので前線の攻防がバノラマのように良く俯瞰することができた。十一月十日完全に桂林を占領、その後重砲兵部隊は桂林の南十七キロ羅綿壩の線に十一月二十五日まで集結。松林の中の鎮徳村に駐留し、その後独立重砲兵第六大隊は第十一軍の隸下を離れて南方戦線の急激なる緊迫に対応して米軍の上陸を想定、上海地区に移動することになった。

昭和二十年三月、上海に向けて部隊は四梯団に改編し、先ず長沙をめざして前進を開始した。三月十七日に湖南省の祁陽県の帳家亭という所に到着した。既にこの地方の中国住民は日本の敗勢を敏感に察知しており、日本軍に対する対応も敵対的であり、食糧の調達その他にも非協力的に急変していた。遂に敵ゲリラの不意打ちに遭い戦死者、負傷者を出すにいたった。

長沙、衡陽を経て漢口、上海に到着する間、筆舌に尽くし難い辛惨を嘗めて上海郊外の新陣地構築予定地に到着することができた。

ついで終戦となり、昭和二十年十二月二十七日上海北方、呉淞に集結、検閲後乗船、同夜出航、故国へ向けて眠れぬ夜を海上で過ごした。

昭和二十一年一月一日鹿児島港に入港、復員式後それぞれ故郷への家路に就いた。

渡河材料中隊

山梨県 三津田 泰永

昭和十五年九月二日、教育召集により東部第九四部隊へ入隊、昭和十六年三月二十日一等兵に進級、同月二十五日除隊となる。

昭和十七年八月二十九日、二度目の召集令状が来た。それを妻に見せた時妻の顔は蒼白になった。八十二歳の祖母はポロポロ涙を流した。妻とは新婚一年そこそこの短い月日であったのである。

第一回召集解除になった昨年の夏、父は胃癌で死亡、祖母と小生だけの家族となった。昭和十六年十月、祖母とお前一人ではどうにもならないだろうと親類会議の結果、早々に結婚した妻でしたが、召集令状が来た以上新婚気分にはたつてはられない。小生はもう野戦行きを覚悟した。二度と我が家を見ることがないのではないかと思った。妻、いせ子に「後は頼むぞ、オ